

安倍能成^{あべよししげ}

「学習院中興の祖と称された偉人」

えがお
愛顔つなぐえひめ国体・えひめ大会
文化プログラム県主催事業

◆ごあいさつ

愛媛県出身の哲学者、教育者であった安倍能成は、第二次世界大戦終了後まもなく文部大臣に就任し、GHQが招聘したアメリカ教育使節団に対し誠実に堂々と戦後日本の教育方針を述べ、敗戦からの復興に励む国民に大きな希望を与えました。また、大臣退任後は教育刷新委員会委員長を務め、現在に通じる戦後教育制度の骨子を定める中心的役割を果たしました。

昭和21年10月、安倍能成は、学習院院長・山梨勝之進の強い招請により、公職追放となった勝之進の後を引き継ぎ、第18代学習院院長となることを引き受けました。このころの学習院は官立学校から私立学校へと移行する過渡期にあたり、能成は、政府の援助が全く無くなり財政的にも大変苦しくなった新制学習院の難しいかじ取りをしていくこととなりました。しかし、このような困難な状況下にあっても能成は、学習院の新たな教育理念の追求と体制の整備に20年にわたって力を尽くし、「学習院中興の祖」と称されるようになりました。

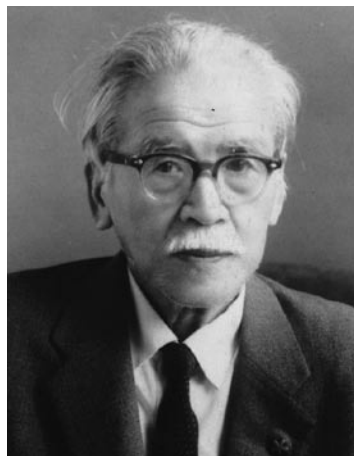
本展示会では、第二次世界大戦中～終戦後を中心に、時代を追って安倍能成の偉業を紹介するとともに、硬骨のリベラリストと呼ばれたその人間像に迫ります。展示をご覧になった皆様が、未来を担う若人たちに自由と責任とを問い、独立精神を訴え、惜しみなく情熱を注ぎ続けた偉人「安倍能成」の業績を見つめ直し、更なる関心を持っていただければ幸いです。

最後に、本展示会の開催にあたり、格別のご高配を賜りましたご親族様をはじめとする関係各位にこの場をお借りしまして厚く御礼申し上げます。

平成29年9月

主 催 者

◆安倍能成・略歴



明治16（1883）年、松山市街小唐人町（現、松山市）生まれ。愛媛県尋常中学校（現、愛媛県立松山東高等学校）、第一高等学校（現、東京大学教養部）を経て東京帝国大学（現、東京大学）へ進学。大学生の時に趣味の謡が縁で夏目漱石の知己を得て、後に漱石門下四天王と呼ばれるようになる。大学では哲学を学び、卒業後は慶應義塾大学、法政大学、第一高等学校などの講師や教授を歴任、その後、哲学・哲学史研究のためにヨーロッパへ留学し、帰国後、京城帝国大学教授、同法文学部長、第一高等学校長を歴任した。

昭和21（1946）年、幣原改造内閣で文部大臣となり、文相退任後は教育刷新委員会委員長を務め、戦後日本の教育制度改革に尽力した。昭和21（1946）年10月、学習院院長に親任され、官立学校から私立学校へと移行した新制学習院の発展に尽力し、亡くなるまで在任した。

一方、平和運動にも参画し、昭和23（1948）年結成の「平和問題談話会」の議長となり、発足以来3回の声明を発表して当時の世論に大きな影響を与えた。戦前・戦後を通じて一貫した自由主義者であり、戦前の軍国主義に対する批判のみならず、戦後の社会主義への過大な評価に対しても批判的な態度を取った。

カント哲学の第一人者であり、『カントの実践哲学』、『西洋古代中世哲学史』などの哲学の専門書を数多く執筆した他、『岩波茂雄傳』（讀賣文学賞受賞）、『戦後の自叙傳』、『我が生い立ち』など、多くの著書がある。

昭和41（1966）年、順天堂医院で死去。享年82歳。戒名「慈仙院学堂能成居士」。墓は東慶寺（神奈川県鎌倉市山ノ内）にある。

◆安倍能成の生い立ち

○幼少時

安倍能成は、明治16（1883）年、松山市街小唐人町（現、松山市）に生まれた。「私の家は大街道といふ所にあり、（中略）私の家も子供心に割に大きいと思つて居たが、屋敷は百五十坪程しかなかつたとも聞いている。」（『我が生い立ち』）

明治23（1890）年、松山市外側尋常小学校（現、番町小学校）に入学。小学校時代能成は、担任教師・寒川朝義（俳人・寒川鼠骨の兄）から、生涯のモットーである「正直」の原点となる叱責を受ける。

○愛媛県尋常中学校時代

明治29（1896）年3月、愛媛県尋常中学校（現、県立松山東高等学校）を受験し、2番の成績で合格した。5年生のとき、能成は演説部で理事となった。この頃の能成は、仙台の第二高等学校（現、東北大学）教授を辞めて博文館に入った高山樗牛の文章を愛読しており、樗牛の影響を多大に受けた演説をしている。

○第一高等学校時代

明治35（1902）年7月、第一高等学校（現、東京大学教養部）第一部甲に3番という好成绩で合格した。高等学校時代、能成のその後の人生に、大きな影響を与え



●写真「松山中学校演説部の理事」
明治34（1901）年3月撮影。安倍能成は前列左。
（愛媛県立松山東高等学校所蔵）

る2つの出来事があった。

明治36（1903）年、同級生の藤村操が人生に悩み「巖頭之感」という詩を遺し、華嚴の滝に投身自殺をした。操の死は同級生に多大な影響を与え、勉学に手がつかなくなる者が多数出て、この年の学年末には能成を含めた17名の落第者が出た。

岩波書店の創業者、岩波茂雄と能成の出会いは、第一高等学校に在学中の時である。能成は「私の生涯にとっての大事件は、そのクラスへ上級生の岩波茂雄が落ちて来たことである。」（『我が生ひ立ち』）と記している。2人はすぐに懇意となり、それから生涯の友人となる。

○東京帝国大学学生時代

明治39（1906）年、能成は、東京帝国大学文学部哲学科に入学し、主にスピノザ、カントの哲学を研究した。大学時代に、特に影響を受けた教師が2人おり、一人がドイツ系ロシア人のケーベル。能成はケーベルを「西洋の古典文化と思想とを身に体した学究」（『我が生ひ立ち』）と評している。

もう一人が波多野精一で、宗教哲学研究の第一人者であった。能成は、「東大の講義の中で、これこそ大学の講義といふものだらうと思つたのは、波多野精一博士の『原始基督教史』であつた。」（『我が生ひ立ち』）と評している。

○大学卒業後の教師時代

大学卒業後、能成は文筆活動で生計を立てようと考えたが、自信が無かったため、教職で主に生計を立て、原稿料でそれを補うこととした。能成は、女子英学塾（現、津田塾大学）、日蓮宗大学（現、立正大学）、慶應義塾大学、法政大学予科、第一高等学校などで教鞭をとった。

○欧州留学～京城帝国大学教官時代

大正13（1924）年、能成は官命により、哲学及び哲学史研究のため約1年半の間ヨーロッパへ留学した。

大正15（1926）年、能成はヨーロッパから帰国し、京城帝国大学法文学部教授に就任した。能成は昭和15年までの約15年間を京城で過ごし、昭和3年～昭和5年まで法文学部長を務めた。

能成は、朝鮮各地を巡り、朝鮮の人々の生活と文化をつぶさに観察した。そして、そこで知り得たことを論文にし、朝鮮の文化が非常に素晴らしいことを紹介して、日本人が抱いていた朝鮮民族への蔑視思想を痛烈に批判した。

◆一高校長・安倍能成

昭和15（1940）年9月、能成は母校第一高等学校（現、東京大学教養部）からの要請をうけて帰国し、校長に就任した。当時の日本は中国と戦争中であり、また翌昭和16年末には太平洋戦争が勃発するという、日本が最も混乱した時代に校長となった。

当時の一高の学生に対し能成は、これまでの伝統に甘えたエリート意識を持ち、保守的な考えに陥っている者が多いと憂えたが、一方で学生を「可愛い」と感じ「概して生徒はさすがに先生よりは上等であった」（『我が生ひ立ち』）とも思っていた。能成は、学生の健全な自立と自己啓発の可能性を信じ続けたのである。

能成のこのような態度は、憲兵隊から学生を甘やかしていると捉えられ、度々呼び出しを受けた。それに対し能成は、「面従腹背」と言うことが一番嫌いなことであるとし、表面的な言動よりも学生の内面を見るように反論し、学生を守り続けた。

◆戦争と一高～能成の苦悩

昭和17（1942）年後半以降、日本軍がミッドウェー海戦に敗れると次第に敗戦の兆しが見えるようになった。第一高等学校の寮の食料も欠乏し、召集により学生も出征するようになり、昭和18年度からは高等学校の修業年数が3年から2年に短縮された。



●写真「岩波茂雄渡米の送別」

明治37（1904）年撮影。岩波茂雄は第一高等学校を2回落第し、除名となった。その後、アメリカへの渡航を決意したが、母親から諫められたため、また旅券発行の許可が下りなかったため断念した。

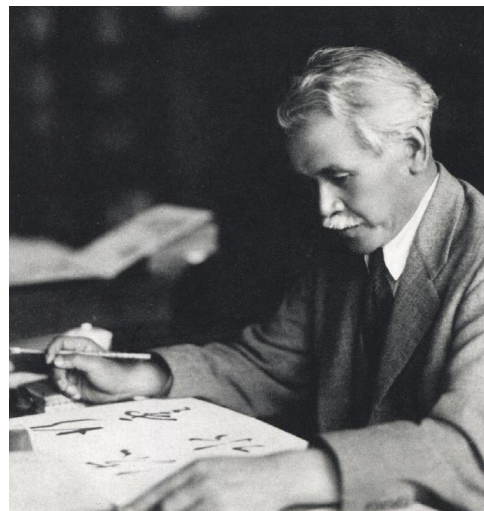
この写真は、アメリカ行き送別の記念写真。左から北島霞江、椎名純一郎、阿部次郎、岩波茂雄、安倍能成、藤原正。

（個人所蔵）



●写真「日蓮宗大学時代の能成」

大正3（1914）年4月29日撮影。左から3番目が安倍能成。（愛媛県立松山東高等学校所蔵）



●写真「安倍能成校長」

昭和15（1940）年9月撮影。（東京大学駒場博物館所蔵）

昭和18（1943）年10月12日、「教育ニ関スル戦時非常措置方策」が閣議決定されると、理工系や教員養成課程の学生を除く一般学生の徴兵猶予が完全に廃止された。学徒出陣は戦時中の学生にとって最も劇的なことであった。同年10月21日、第一次学徒兵の壮行会が、氷雨の降る中、東京代々木練兵場で行われた。出征した学生の多くは帰らぬ人となり、能成は苦悩した。身体は痩せ細り、アゴが尖り、眼が窪んで痛々しい程であった。

昭和19（1944）年、学徒勤労令が出ると、新学期から、ほとんどの学生は勤労奉仕に出ようになり、正規の修業課程とは程遠い生活を送るようになった。また、当時の一高には中国からの留学生が43人いたが、彼等は警察から監視され、他の学生ともうまくいっていなかった。能成は彼等の身の安全を図るため、終戦直前に山形の温泉地へ疎開させた。

◆終戦・長男の死

昭和20（1945）年4月13日、空襲によって能成の下落合の自宅は罹災し、仮の住居とした一高の官舎も5月25日の空襲でまたも焼け落ちた。8月15日、日本は降伏して終戦となった。能成は、一高の倫理講堂で白髪に手を突っ込んで頭を抱えたまま、終戦の玉音放送に聞き入っていた。終戦の翌月、9月3日から一高の授業は再開された。10月には、山形に疎開させていた中国の留学生を東京に呼び戻し、また、終戦と共に廃止された陸海軍の学校や、植民地にあった学校からの編入生受け入れのための入学試験や事務に追われた。

同時期、能成は新聞、雑誌などからの原稿執筆や各方面からの講演の依頼に多忙を極めた。混迷する日本の社会は、能成の哲学を欲していたのである。本来哲学者の能成は、広範な知識に裏打ちされた独自の道徳観を持ち、日本の復興に必要な精神的な道標を示し続けた。

その様な中の10月29日、能成の長男・亮が病気でこの世を去った。しかし、能成は、いつまでも悲しむことができず、新しい日本の再建ために邁進していった。

◆前夜

太平洋戦争が終結した直後の昭和20（1945）年8月17日、戦後処理をするための東久邇宮内閣が成立し、文部大臣には能成の第一高等学校時代の同期である前田多門が就任した。10月に入ると新内閣に交代するのではないかという噂が出始めたが、そのような中、能成は「讀賣報知新聞」に依頼されて「新内閣に望むこと」という論文を、10月7日に掲載した。その中で能成は、文部大臣に内閣大臣の最も重要な人物を振り当てることを切望している。

その2日後の10月9日、幣原内閣が成立し、前田多門は留任して文部大臣を務めることとなった。そして、12月19日、能成は貴族院議員に勅撰された。

昭和21（1946）年1月11日午後3時、能成はNHKラジオで「青年学徒に告ぐ」と題して講演をし、講演を終えて帰宅すると前田多門の来訪を受けたことを聞き、同夜、能成は多門の再訪を受けた。多門は、戦時中に新潟県知事を務めていたため公職追放の処分を受け、文部大臣を辞することとなっていた。多門は、能成に文部大臣への就任を懇請した。その晩、能成は即答を避けたが、翌早朝、能成は多門の三顧を受け、文部大臣への就任を引き受けた。敗戦国日本が、今後どのように進んでいくのか見当がつかない混乱期に、能成は文部大臣となることを決心した。

◆文部大臣としての4か月

昭和21（1946）年1月12日夜半、能成は岩波茂雄から借用したモーニングを着て宮内省へ行き、親任式に臨んだ。それまで政治家とほとんど交流がなかった能成は、当時の閣僚にほとんど名前を知られておらず、総理大臣の幣原喜重郎でさえ、能成を俳人だと思っていた。

当時の日本の政治は連合国軍総司令部（GHQ）の管轄下であり、文部省の管理は民間情報教育局（CIE）が当たっていた。能成にとっての最初の占領軍との接触は、昭和21（1946）年1月22日のCIE局長ダイク代将との会見だった。この時能成はダイク代将に「私は主張すべきものは主張し、無理な約束はしない積もりだ」と述べ、ダイク代将よ



●写真「同窓生戦没慰霊祭
（霊前で追悼文を読む安倍能成）」

昭和20（1945）年撮影。「むつかしいことではあるが、生死の程は、諸君はこれを国家と歴史の動きゆく大いなるいのちに任せて、徒らに生に拘ることも死を急ぐことも避けてもらいたい。日本が東亜が必要とする人々は、神が死なせないであろう。」（『向陵時報』）

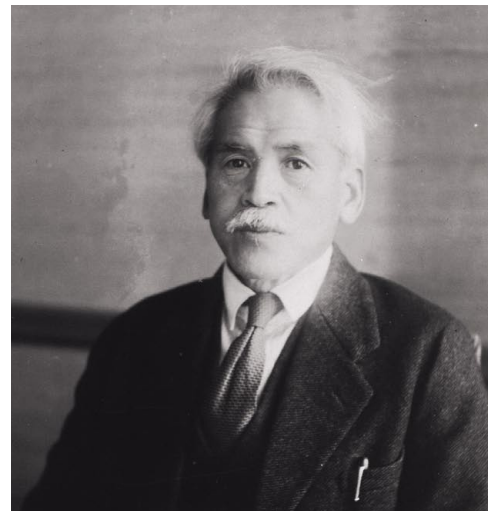
学徒動員の際、能成は餞としてこの言葉を贈ったが、動員された学生の多くが帰らぬ人となった。

（東京大学駒場博物館所蔵）



●写真「長男夫婦とともに」

昭和18（1943）年5月8日、東京新橋の江木写真館にて撮影。



●写真「文部大臣就任直前の安倍能成」

昭和21（1946）年1月1日撮影。

（個人所蔵）

り同感であるという返答をもらっている。またこの時、日本史の教育についても意見交換がなされ、会見はスムーズに行われた。

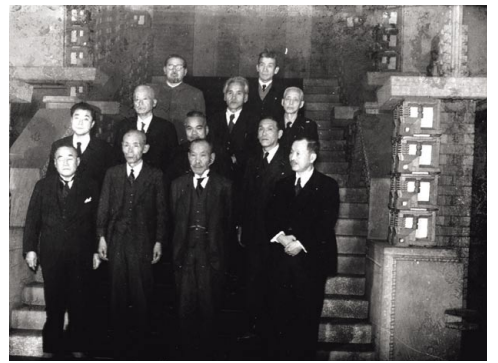
昭和21（1946）年3月初旬、アメリカ教育使節団の一行27名が来日した。この使節団は、連合国総司令官マッカーサーによって、日本の教育の民主化を遂行するために、GHQと日本側関係者に積極的に助言が出来るアメリカの教育の専門家の派遣が要請されたことにより、結成されたものである。

3月8日、能成は、文部大臣として華族会館で一行を迎えた。どのような教育制度を押し付けてくるか、日本側は戦々恐々としていたが、そのような中、能成は機先を制し、使節団に堂々と戦後日本の教育方針を述べた。

情理を尽くし、理路整然と述べられた歓迎の辞「米国教育使節団に対する挨拶」は、敗戦国の文部大臣が戦勝国の教育使節団に対して「訓示」したともいえる内容だった。能成は、このスピーチの中で、①日本教育が少しでも早く国際社会に開かれること、②日本の文化や国民性を尊重すること、③日本の科学研究を不当に抑制しないことを強く求めた。

演説が終わると、使節団のストッダード団長自ら壇上に上がり、賛意の握手をした。日本はドイツと比べて、教育に対するアメリカの介入がはるかに少なかったが、これは能成の誠実で堂々とした態度が、GHQの多大なる信頼となったからであり、敗戦からの復興に励む国民に大きな希望を与えた。

能成は、就任から約4か月後の昭和21（1946）年5月22日、幣原内閣総辞職と共に文部大臣を辞し、次の総理大臣となった吉田茂から留任を懇請されたが、これを辞退した。能成は、自身の政治理念と実際とが大きく異なっていると感じざるを得ず、閣僚として責任が果たせないと考え、辞職を決心したのである。



●写真「幣原改造内閣 閣僚の記念写真」

昭和21（1946）年1月15日撮影。GHQのマッカーサー元帥は、ボツダム宣言に則り、日本の軍国主義侵略政策に加担した総ての人物を公職から追放するように指示した。この結果前年10月に発足していた幣原内閣は総辞職か内閣改造かに追い込まれたが、5人の閣僚を更迭し改造をすることでこの難局を凌いだ。

3列目中央が安倍能成、最前列右端が幣原首相、左端が吉田茂外相。

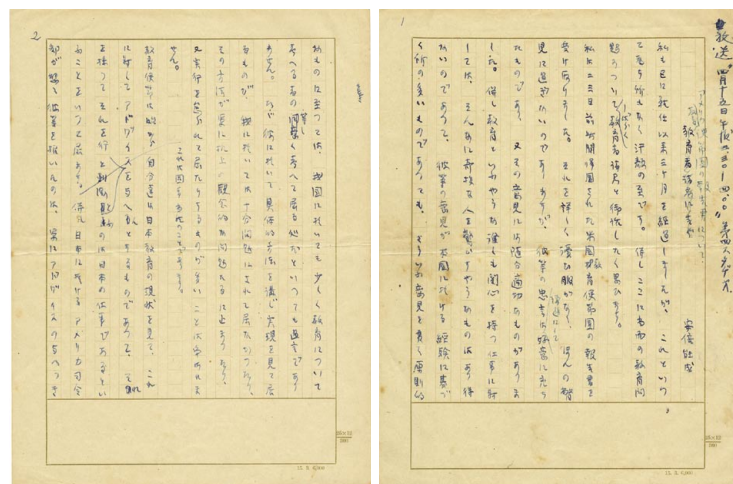
（読売新聞社所蔵）



●写真「アメリカ教育使節団とともに」

昭和21（1946）年3月8日撮影。3月5日と7日の2日に分けて来日したアメリカ教育使節団を、能成は文部大臣として華族会館で迎えた。ここで能成は歴史的スピーチ「米国教育使節団歓迎の辞」を披露した。

写真は右から2番目がストッダード使節団長、左から2番目が安倍能成。



●原稿「アメリカ教育使節団の報告書について」冒頭部分

昭和21（1946）年4月15日作成。米国教育使節団がGHQに提出した報告書は、日本の教育史上最も重要な文書の一つに数えられている。その中には、教育委員会の設置、PTAの導入などが提言されている。能成はこの報告書を受けて、「彼等の忠言は謙遜にして好意に満ちているものであり、又その意見には随分適切なものがありました。」とこの原稿の冒頭に記している。

◆文部大臣退任後

能成は、大臣退任後も政界や教育改革から手を引いたわけではなく、昭和21（1946）年8月に貴族院憲法問題特別委員会委員長及び国語調査会会長に就任、同年9月からは教育刷新委員会委員長に就任している。

日本国憲法は、「草案」が昭和21（1946）年4月17日に政府から公表され、直ちに枢密院へ回されて「憲法改正案」となった。その後、第90回帝国議会に提出、衆議院で可決された後に貴族院に回附、特別委員会で審議・修正の末に貴族院本会議で修正案が可決され、同年10月7日に衆議院で再び修正案を可決して発布の運びとなった。「主権在民」「戦争放棄」を謳った日本国憲法は、アメリカ教育使節団の一人から、アメリカ合衆国憲法より民主的だと評された。

教育刷新委員会は、昭和21年中に17回の総会が開催され、年末に教育基本法の前案ともいえる決議事項が吉田茂総理に報告された。また、その決議事項では6・3・3・4制の学制、小・中学校の義務教育化、男女共学、教育の機会の均等などが提案されており、現在に通ずる戦後教育制度の骨子が、ここで決められた。

また、国語調査会では、任期中に「現代かなづかい」の制定という大きな仕事が待ちかまえていた。これまで用いられていた歴史的仮名遣いを改めることになったが、利便性などが考慮され、昭和22（1947）年に改定された。

「その結果の功罪とは別に、ともかくも『現代かなづかい』の責任が私にあることをこゝに明言しておく。」と能成は『戦後の自叙伝』に記している。

◆学習院院長就任

昭和21(1946)年の「七月二日に学習院長で海軍大将の山梨勝之進さんの来訪を受けた。(中略)山梨さんの用件は旧軍人としての自分は追放されねばならぬ故、後をやってくれとのことのお話で、仙台なまりで諄々のこと細かに説得された。その時すぐ承諾したか、返事を保留したかは覚えていないが、十月十八日には学習院長に親任されることになった。」(『戦後の自叙伝』)

学習院は明治10(1877)年に華族の教育を目的に設置され、明治17(1884)年から宮内省所管の官立学校となっていた。太平洋戦争終戦直後、学習院はGHQから特権階級の学校と見なされ、存続の危機に立たされたが、当時の院長・山梨勝之進や浅野長光事務官、それにイギリス人教師のブライス等の尽力により、私立学校として再出発することが決まっていた。

能成が学習院長の親任を受けた昭和21年10月は、学習院が私立学校へと移行する前年で、正にその過渡期にあたる。能成は、政府の援助がなくなり財政的にも大変苦しくなった新制学習院の難しい舵取りをすることになった。

◆学習院大学の設置

学習院が官立学校から私立学校へと移行し、政府の援助が無くなって経済的に大変厳しい状況にある中で、大学設置の問題が浮上してきた。戦後の学校制度の改革によって、多くの地方都市に小規模ながら大学が創設され始めたからであった。旧制高等学校のうち、ナンバースクールと呼ばれた第一高等学校から第八高等学校は、その所在地の国立大学の教養部として吸収され、それ以外の高等学校も、各地の師範学校や専門学校と合併して地方色のある大学へと移行していった。

学習院での大学構想は、昭和22年9月に発足した学習院教育委員会で議論が交わされた。昭和24(1949)年4月、新制学習院大学が開学し、能成が学長を兼任した。1年生、2年生合わせて406名の入学生を迎えたが、全員を収容できる建物が無かったため、入学式兼開講式は目白キャンパスの中央グラウンドで行われた。能成は、入学志願者を確保するため大学の教授とともに全国各地を回り、新しく生まれ変わった学習院大学のPRに努めた。

昭和24(1949)年4月、新制学習院大学は開学したが、まだ十分ではなかった戦災の復興のためにも、多額の資金を調達しなければならなかった。能成はそのため、寄付金集めに奔走するほか、授業料の度重なる値上げ、バザーの開催、敷地内の樹木を炭にして給与の代わりとする等、考えられるあらゆる手を打った。

「学習院は廿二年度、廿三年度に寄附金千萬圓の募金を企て、今やほぼ当初の目的を達した。今年四月から文政学部と理学部との大学を創設する上、更に戦災の復興を図つて、新たに最小限の費用三千萬圓の寄附を募集しようとしている。今の私のちっぽけな心はこの寄附のことで一ぱいである。『福音を恥とせず』といったボーロに比べては品下るが、私もまたキフキンを恥としてはゐられない」(『私の歩み』)。能成は、毎朝起きて、「あ、今日も寄附をもらひに廻るのか」と憂鬱になるほどだったと語っている。

◆学習院の発展

その後も能成は学習院の発展のため尽力し続けた。大学は開学から昭和30年代にかけて、学部・学科の再編や大学院の拡充などが進められ、開学当初2学部5学科だった体制が4学部12学科へと発展し、その規模に見合う施設の整備が求められた。また、老朽化した図書館及び高・中等部の体育館の整備、校舎の増築なども急務となっていた。

学習院が私学10周年を迎えた際の式典で能成はこう語っている。「この十年を顧みると唯無我夢中にやってきたといふだけで、そんなに苦勞も意識しなかった。眼前の処理せねばならない事態に対して、人々の協力を得て何とか凌いで来たといふに過ぎない。(中略)私は学習院に飛びこまされた時の「自分の外に頼む者はない」との高慢を棄てて、人と事を共にするといふ謙



●写真「学習院長時代の安倍能成」
(学習院女子中・高等科所蔵)



●写真「学習院大学開講式」
昭和24(1949)年5月11日撮影。入学式を兼ねて目白キャンパスの中央グラウンドで行われた。
(学習院アーカイブズ所蔵)



●写真「開学当初の校舎」
昭和24(1949)年撮影。左は理学部、右は文政学部(本館)。
(学習院アーカイブズ所蔵)



●学習院大学第1回卒業生を送る
昭和27(1952)年3月撮影。学習院大学第1回卒業式は、大講義室に天皇・皇后両陛下をお迎えし、短期大学と男女高等科と合同で挙行された。
(学習院アーカイブズ所蔵)

虚に返り、幸いに健康な老躯を学習院の基礎的建設に捧げる決心を新たにした。」(『戦後の自叙伝』)

学習院創立85周年、私学15周年を昭和37(1962)年に迎えるに当たり、昭和34(1959)年から、これらの施設の充実を図るための記念事業が開始され5億円の寄付を募ることとなった。この記念事業により施設は飛躍的に向上し、学習院はさらなる発展の礎を築くことができた。

そして、昭和38(1963)年10月18日、天皇・皇后両陛下をお迎えして、学習院創立85周年、私学15周年を記念した盛大な式典が挙行された。

◆平和問題談話会

能成が、学習院院長としての務め以外で一時期を入れたのが平和問題談話会であった。この談話会は、昭和23(1948)年12月12日、当時、岩波書店編集長を勤めていた吉野源三郎によって結成された学識者グループ「平和問題討議会」が基となっており、発足以来3回の声明を発表して当時の世論に大きな影響を与えた。

1回目の「戦争と科学に関する科学者の声明」では、「戦争を問題解決の手段でなく癒し難い創痕を残すものとなし、殊に現代の原子力戦、細菌戦が必然的に人類の滅亡を来すといふ戦争の惨禍を明らかにし、政治家と民衆とを教へる科学者の任務を説き、この平和に導く教育の意義の重大さ」(『戦後の自叙伝』)を力説している。また、昭和25(1950)年1月15日の2回目の声明では「全面講和・中立・軍事基地の拒絶」の3つを柱として訴えたことで、平和論争の一大勢力となった。能成はこの3点について、平和憲法の趣旨を貫徹するための、肝腎要であると論じている。3回目の声明は、昭和25年6月に朝鮮戦争が勃発したことを受けて同年9月に「三たび平和について」と題して発表され、岩波書店の発行の総合雑誌『世界』12月号に掲載された。

能成は平和問題について熱心に取り組み、談話会が一つのきっかけとなって、日本全国で平和問題に対する関心と議論が深まることを切望した。

◆晩年・逝去

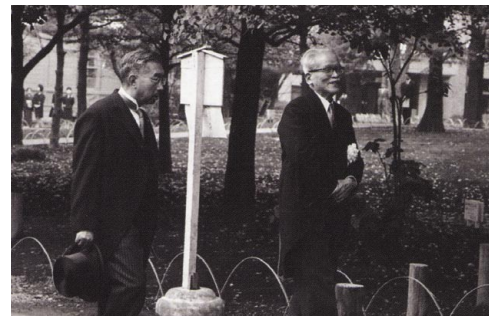
能成は、自著『戦後の自叙伝』の末尾に晩年の決意としてこう述べている。「私は老来なほ世界と日本とは関心を持って居る。しかしこの関心に基づいて日本と世界とに働きかけるには、今の私は世界をも日本をも知らな過ぎる。老後の残生を学習院に捧げ、学習院を通じて幾分でも世に貢献することに、私は満足を見出したい。」

昭和30年代から40年代、高度成長期を迎えた国民の生活は大きな変化を遂げ、大学への進学希望者が急速に増えた。その受け皿は私立大学に求められ、「大学の大量化」によって受験戦争の激化、施設整備の遅れ、教員不足、学生と教員の意識のずれなど様々な問題が発生し、大学の更なる変革と発展が求められた。そのような時勢の中の昭和41(1966)年6月7日、第二次世界大戦後の教育制度の改革、官立学校から私立学校へと移行した新制学習院の発展に尽力した安倍能成が、恭子夫人ら家族に見守られながら、順天堂病院で静かに息を引き取った。享年82才であった。

同日午後4時ごろ、能成の逝去をお聞きになった皇太子殿下ご夫妻及び常陸宮ご夫妻が、能成の自宅を弔問された。6月10日、能成の学習院葬が体育館で行われ、葬儀委員長を麻生磯次学長が務め、友人総代として武者小路実篤が弔辞を述べた。

「人間の人間たる所以が自由にありと信ずる以上、人間の進歩も亦、自由とその所産たる文化に於いて見出す外はないと信ずる。」(昭和25年9月刊雑誌『世界』収録「私の所感」)

能成は生前、学び舎に集う若者たちに自由と責任とを問い、独立精神の必要性を訴え、若者たちに惜しみなく情熱を注ぎ続けた。能成の残した精神は、今を生きる日本人に対してもなお深いメッセージを送り続けているのではないだろうか。



●写真「昭和天皇をご案内する能成
(学習院創立85周年記念式)」
昭和38(1963)年10月18日撮影。
(学習院アーカイブズ所蔵)



●写真「平和問題談話会の会合」
昭和29(1954)年8月撮影。左から都留重人、
土屋清、安倍能成、大内兵衛。
(岩波書店所蔵)



●写真「皇太子殿下ご夫妻弔問」
昭和41(1966)年6月7日撮影。安倍能成は
皇太子殿下のご教育係を務めていた。
(朝日新聞社所蔵)



●写真「安倍能成院長の学習院葬」
昭和41(1966)年6月10日撮影。
(学習院大学アーカイブズ所蔵)

協力機関・協力者・写真提供者一覧（50音順・敬称略）

朝日新聞社
学習院女子中・高等科
第一高等学校同窓会
毎日新聞社

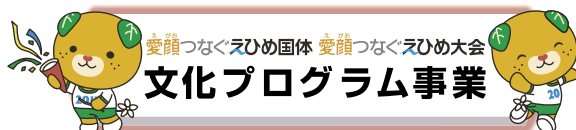
岩波書店
学習院アーカイブズ
東京大学駒場博物館
読売新聞社

愛媛県立松山東高等学校
神奈川県立神奈川近代文学館
東京大学社会科学研究所

青木一平 安倍喬 安倍玲子 今村威 戒田淳 山崎葉子

参考図書

- ・安倍能成 『朝暮抄』 岩波書店 1938年
- ・安倍能成 『青年と教養』 岩波書店 1940年
- ・安倍能成 『時代と文化』 岩波書店 1941年
- ・安倍能成 『巷塵抄』 小山書店 1943年
- ・安倍能成 『戦中戦後』 白日書院 1946年
- ・安倍能成 『一日本人として』 白日書院 1948年
- ・安倍能成 『私の歩み』 要書房 1949年
- ・安倍能成 『一リベラリストの言葉』 勁草書房 1953年
- ・安倍能成 『岩波茂雄傳』 岩波書店 1957年
- ・安倍能成 『戦後の自叙伝』 新潮社 1959年
- ・安倍能成 『我が生ひ立ち』 岩波書店 1966年
- ・安倍能成 『涓涓抄』 岩波書店 1968年
- ・西沢信他編 『嗚呼玉杯に花うけて 第一高等学校八十年史』 講談社 1972年
- ・学習院 『安倍能成先生と学習院』 学習院 1986年
- ・岩波書店編集部 『写真で見る岩波書店80年』 岩波書店 1993年
- ・新潮社辞典編集部 『新潮日本人名事典』 新潮社 1995年
- ・松山東高校百年史編集委員会編 『愛媛県立松山東高等学校百年史』 愛媛県立松山東高等学校 1978年
- ・松山中学・松山東高創立120周年記念写真集編集委員会 『写真集 120年の鼓動』 愛媛県立松山東高等学校他 1998年
- ・学習院大学大学50年史編纂委員会 『学習院大学の50年 写真と図録』 学習院大学 1999年
- ・愛媛県生涯学習センター 『えひめ人物博物館 人物探訪』 第5集 愛媛県生涯学習センター 2003年
- ・山下一郎 『安倍能成先生 学習院中興の祖』 成蹊堂 2004年
- ・松山中学・松山東高創立130周年記念蔵品目録刊行委員会 『創立130周年 資料館蔵品目録』 愛媛県立松山東高等学校他 2009年
- ・青木一平 『安倍能成関係史料の全体像（上） 愛媛県生涯学習センター所蔵史料を中心として』 近代史研究第9号 2009年
- ・青木一平 『安倍能成関係史料の全体像（下） 愛媛県生涯学習センター所蔵史料を中心として』 近代史研究第10号 2010年
- ・愛媛県教育委員会 『平成24年度愛媛人物博物館企画展 安倍能成～教育に情熱を注いだ硬骨のリベラリスト』 2012年
- ・学校法人学習院編 『山梨勝之進・安倍能成 戦後学習院の出発』 学校法人学習院 2016年



主催：^{えがお}愛顔つなぐえひめ国体・えひめ大会実行委員会
愛媛県教育委員会（愛媛県生涯学習センター）

後援：愛媛新聞社、NHK松山放送局、南海放送、テレビ愛媛
あいテレビ、愛媛朝日テレビ、愛媛CATV、FM愛媛